

日本キャリアデザイン学会中間大会(千葉県
野田市)2005を振り返る

金山, 喜昭

(出版者 / Publisher)

日本キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

キャリアデザイン研究 / キャリアデザイン研究

(開始ページ / Start Page)

135

(終了ページ / End Page)

142

(発行年 / Year)

2006-09-30

《中間大会報告》

日本キャリアデザイン学会中間大会 (千葉県野田市) 2005を振り返る

開催日：2005年6月4日(土)、5日(日)

場 所：千葉県野田市役所

主 催：日本キャリアデザイン学会

共 催：野田市・野田市教育委員会

金山 喜昭

はじめに

2005年6月4・5日に千葉県野田市において、日本キャリアデザイン学会の中間大会を開催した。本大会は初の地方大会であり、テーマを「まちづくりとキャリアデザイン」とした。当日は、学会員をまじえて多くの市民が参加し、2日間の入場者は約400名にのぼった。私は、研究組織委員として、その企画や実施に携わった立場から、その概要の説明や今後の課題などを述べる。なお、私が大会の実行委員会事務局長を担当したのは、2001年3月まで18年間、野田市郷土博物館に在職していたことによる。

1 趣旨説明

本来、“生涯学習”というのは、Lifelong Learning と言われるように、学校も含めた地域、仕事、家族などの場で主体的に学び、自己実現をはかることを意味している。国内では、旧文部省に生涯学習局生涯学習振興課が設置され、関連する法律も整備されたことにより、

「生涯学習ブーム」となった。そうした中で、自治体の中には生涯学習モデル都市を宣言することもあったが、その多くは「カルチャーセンター」のように公民館などが、それまで以上に多彩で多くの講座を実施することが中心となってきたようである。それでも1980年後半から90年代初頭では、国民の多くが中産階級意識をもち、余暇の過ごし方の一環として、カルチャーセンター的生涯学習を受容、享受してきたといえる。

ところが、その後のバブル経済の崩壊やグローバル化などに伴い、人々の生き方や生活のあり方が大きく変化するようになり、これまでの生き方が通用しなくなってきた。例えば大企業はこれまで安定していたが、企業間での経営統廃合などによってリストラされる人たちが出るようになってきている。リストラをされた人たちはどうすればいいのか。人生の再スタートをしたい、といった時にどういう手当てができるか。それは従来の教育では十分に対応できない。あるいはフリーターやニートが年々増加しているが、政府の対応はいずれも対処療法的

《中間大会報告》

なもので根本的な解決には至っていない。彼らは決して働きたくないのではなくて、働きたいけれど働けない事情がある。そうした状態を放置しておけば、これは労働力が減少して国の生産量がますます落ちるだけでなく、犯罪予備軍を量産するという見方もある。また最近話題になっているように、犯罪経験者の再犯率が非常に高くなっている。これに対して現在の保護士制度では対応できないことも明らかになっている。そのような事例がどんどん増加して社会が混迷の度合いを深めている実状がある。つまり、累積する諸問題を改善する兆しのない閉塞した社会状況に落ちこんでいる。

そのために人を育てるための新たな処方箋が問われている。学問としての「生涯学習」や「社会教育」の役割も期待されるが、当学会として、新たにキャリアデザインという概念を提示したのは、生涯学習や社会教育では職業や地域コミュニティなども含めて人の生き方を全体的に見直すことを含意していると思われる。当学会ではこれまで研究会等でフリーターやニートの問題、あるいは職業キャリア、あるいは女性とキャリアの形成等について話題にしてきた。

今回「まちづくりとキャリアデザイン」というテーマを設定した理由は、千葉県の野田市を一つのケーススタディとして、行政・教育・企業・市民などの当事者の方々に共通の場で自由に意見を述べていただくことに主眼をおいた。こちらからは、事前にキャリアデザインについての考え方を説明させていただき、また「まちづくりは人づくりである」という命題を提示した上で、それぞれの方の立場や経験などから、「まちづくり」や「人づくり」について自由に語っていただくことにした。こちらが事前に結論を用意して、一定の方向に導くようなことを避けて、むしろ発言からはキャリアデザインに関する重要なヒントが隠されている、あるいはキャリアデザインを考察するヒントになることも期待しながら、まずはその実状や意見を述べていただくことにした。

2 成果

第1日目は主催者挨拶として、学会常務理事平林千牧氏（法政大学総長）、野田市長根本崇氏に続き、茨城県自然博物館名誉館長の中川志郎氏による講演「私のキャリアデザインー動物園と自然博物館」と法政大学キャリアデザイン学部教授の川喜多喬氏による講演「元氣なコミュニティに素敵なお人材：キャリアへのまなざし、デザインへの勇気」が行われた。

中川氏の講演は、ご自分が小学3年の時に行ったドジョウ観察を励ましてくれた先生との出会いが、動物学への志となったことから、キャリアデザインに果す教師の役割の重要性を説かれた。川喜多氏は、文化・中小企業経営・大学・まちづくりなどこれまでの豊富な経験から、学校では取り上げない教育の占める多彩さがキャリアデザインにつながることを披露された。

第2日目の午前のテーマは「地場産業と地域のキャリア形成」。パネリストには、下津谷達男氏（野田地方史懇話会会長）、高梨兵左衛門氏（野田商工会議所会頭）、茂木賢三郎氏（キッコーマン株式会社取締役副会長）、梶田敏宏氏（社団法人野田青年会議所理事長）、司会は八幡成美氏（法政大学キャリアデザイン学部教授）。午後のテーマは「地方自治体とキャリアデザインの課題」。パネリストには、福井秀夫氏（政策研究大学院大学教授）、尾木直樹氏（教育評論家）、青木猛正氏（埼玉県立戸田翔陽高等学校主幹）、根本崇氏（野田市長）、司会は笹川孝一氏（法政大学キャリアデザイン学部教授）。

2日目午前のシンポジウムでは、市民の立場から地場産業がキャリアデザインに果す役割について話し合われた。下津谷氏は昭和20年代から30年代の野田地方文化団体協議会の文化運動を再評価され、高梨氏は現在の商工会議所の活動がまちづくりに貢献していることを述べられた。茂木氏は基礎教育の重要性、企業のお人材がコミュニティに貢献する、まちづくりは持続可能な社会づくりの視野に位置づけをはかる

ことを述べられた。梶田氏からは青年経営者たちのまちづくりが述べられた。午後のシンポジウムは、根本氏から行政がキャリアデザインによるまちづくりに果す役割について話題提供された。なかでも野田定時制高校にキャリアデザイン教育を入れ込むことについては、尾木氏からも「まちを住みやすくする主体的にかかわるひとづくり」となる賛成意見がだされ、青木氏は実際のキャリアデザイン教育の実状について紹介をされた。福井氏も、やり直しのきく社会づくりがキャリアデザインのまちづくりだという認識を示され、行政の役割は住民が生き方を設計する際に豊富な選択肢を用意することだと述べられた。

なお本誌では、そのうち野田市長の根本氏の挨拶と、シンポジウム「地場産業と地域のキャリア形成」を掲載したので、詳細はそちらをご覧ください。

3 シンポジウムの総括と質問に対するコメント

これまでの「まちづくり」というと、行政が行うものだとか、あるいは商店街の整備や観光客を誘致したり、地元経済の活性化を目的にしたものなどが多かったが、先述したように、本会では、キャリアデザインの視点から「まちづくりは人づくり」という考え方を示し、それぞれ異なる立場の人たちが一堂に話し合った意義は大きかったと思う。大会の最後に児美川孝一郎氏は次のように総括と質問（「」文中）をしているので、次にそのコメントを述べることにする。

野田地方文化団体協議会の人たちとキャリアデザイン

（シンポジウム「地場産業と地域のキャリア形成」について）「文化に関わる様々な政策、あるいは博物館づくりなどの文化運動など、そういう文化に関わるような動きがどういう意味でまちづくり全体に影響を与えていくのか、あるいは個人が自分のキャリアをデザインする際

にどう影響していくのか、という点についてはもう少し具体的に知りたいと思いました」（以上、児美川氏の発言）

個人が「まちづくり」の過程で、どのようにキャリア形成をしていくかについては、今後の調査が必要になるであろう。現状の知見では次のことが言える。昭和23年3月に野田地方文化団体協議会を設立する僅か半年の期間に、ほぼ20～30名ほどの文化に関心を寄せる市民は精力的に協議会の設立を目標にした活動を行った。メンバーは、野田の出身者を含めて、外部からの人材が目立ったが、設立に際しては外部出身者たちが中核メンバーとして活躍した。佐藤真氏は、函館市図書館から興風会図書館の司書となり、池松武之亮氏（熊本県出身）や小田倉一氏はキッコーマン病院の医師として来野し（その後、池松氏は個人医院を開業する）、市山盛雄氏（山口県出身）はキッコーマンの社員であった。要するに、地場産業のキッコーマンの関係者として文化的な素養をもつ人材が集まったことになる。そこに町の文化青年たちも合流していくことになった。その中の実質的なリーダーは佐藤氏であり、勤務する図書館は協議会の事務局となり、佐藤氏の部屋はサロンの場として会員たちの拠点となった。図書館を運営する興風会は、キッコーマンの醤油醸造家が出資する財団法人として社会事業活動をしており、図書館はその業務の一部であり、佐藤氏はその運営の責任者となっていた。協議会の財政は、一部の会員の寄付や興風会やキッコーマンから資金的な援助があり、市民たちがマネジメントするだけの体制にはなっていなかったようである。それでも、市民は様々な職種の人たちが集まり、自由放談の場として、文化によるまちづくりを語り合ったという。彼らが集った理由の一つには、職場以外に地域で興味関心を共有する仲間づくりをして自由に語りあうことに楽しさや生きがいを感じたことがあげられる。商売人は孤独であり職業ごとの組合は閉鎖的で競争社会である。そこから脱して文化やまちづくりの中でコミュニケーションをつくる意義について

《中間大会報告》

て、池松氏は「お互いに知り合い、灯を点じるための放談の集い」（池松武之亮1963『文化祭と団体の沿革』野田地方文化団体協議会、p5）と述べており、昭和26年に発足した二六クラブでも提唱者の市山氏は無目的な集まりの放談会をもち「無目的の中から生まれるものが本物だ」という考え方をしている。こうした自由放談の場は市民の共感を得たようで、協議会に加盟していない人たちの参加者も目立った。こうした文化活動を共有するコミュニティは、家族・友人とも違い、最初は自己満足的なものであったが、次第に社会貢献への色彩を帯びていくことになる。

協議会の設立当初の起草案には、野田地方から民主的な国家建設を目指すことをビジョンとして打ち出していたが、当時を知る人によれば雰囲気的には文化親睦会のようなものであったが、協議会を設立した半年後には教育委員会の公選に際する選挙の啓発活動を実施している。それは教育委員に相応しくない人物が立候補することに対して、教育委員には良識的な人物を選ぼうと市民に呼びかけるものであった。紙芝居やスライドを作成して街頭で普及活動をした。選挙後には、教育委員と教育・学術・文化面での町の方向性について協議をしている。こうして、当初は個人的な興味関心から文化による仲間づくりをしたが、その後には社会貢献性を帯びるようになり、その中から博物館建設への準備活動にもつながっていくことになった。

こうして、最初は個人的な興味関心から始まり、ビジョンを共有する人たちからなるコミュニティが形成され、かつそれを運営する資源（ヒト・モノ・カネ）の裏づけをもつことによって、ビジョンの実現化に向けて動きだした。野田市郷土博物館の建設は、その延長線上の一つとして位置づくことになる。市民が個人としてキャリア形成をしていくことはそうした過程の中で次第に備わっていったものと思われる。なお、野田の事例が他地域と異なることは、醤油産業を基盤にした「まちづくり」であった点であり、市民の自立性は醤油産業の企業家の理

解や支援を前提とするものであったことである。よって各自の温度差をもち自己矛盾も感じていただろうが、それ以上にやりがいや生きがいをもって活動していたといえる。以上、現在とは異なる状況のもとで、市民性が形成された一つの事例である。

まちづくりと市民参加のあり方

まちづくりで＜参加＞をキーワードにすると「企業や NPO、普通の市民、子供、それぞれの参加の形はまだあると思いました。市民参加、企業参加、行政参加、それぞれのネットワークがあつて、行政はそれぞれの意向を掴んでいると思いますが、それらが一緒の場集って、それだったら学校側と企業は協力できるとか、NPOと学校は一緒にできるというような、対等なパートナーシップでまちづくりをしていく仕掛けはもう少しあつていいのではないかと思います。実はすでにあるのかもしれませんが、今日の話では見えなかったのもう少し知りたいところです。市民参加を促しながら全体として野田の将来像について意見を集める合意形成のプロセス自体がそう簡単に一致するとは思いませんが、そのプロセス自体が一つの学習だと思います。そういう学習を通じて実は、個人が自分のキャリアデザインをする、企業人として生きているけど少しは地域にも関わらなければとか、地域の意思決定に多少関わっておきたいとか、あるいは学校で仕事をしているけれど地域の市民として関わってきたいという際の学習の場面でもあると思います。したがって、どこかで妥協点をつくって合意することが目的というよりは、幅広い主体の人たちが集って将来イメージをつくっていくという参加意識がないとできないのではないかと思います。（シンポジウム「地方自治体とキャリアデザインの課題」で）負担は皆で合意して分け持ちましょう、という市長の意見には賛成ですが、負担するからには自分も意思決定のプロセスに参加しないと、みんなで平等に負担だけしましよといわれても負担する気にはならないと思います。」（以上、

児美川氏の発言)

野田市では、平成12年9月の総合計画（平成13年度から実施）を策定する際に、平成8年1月から平成12年4月までの約4年にわたり100人委員会を設置して、市民100人がまちづくりでの審議、各地区、各界（商工業・緑とふるさと・農業・青少年・廃棄物・工業団地・自治会など）との懇談会を設置して意見聴取をしてその結果を活かして野田市総合計画を作成したことがある。全国自治体では、行政が一方的に作成した「市民不在」の総合計画が作成されていたのに比べれば、全国的に先駆けとなる市民参加型の都市計画づくりであった。

しかし、さらに日常的な形での市民参加型の「まちづくり」を想定することが、市民のキャリアデザインには必要になる。ここで課題になるのが、誰がコーディネーターの役割を担うかである。一つの考え方としては、総合計画づくりのように行政が担当するケースだが、ややもすると行政主導の形になりかねない。別の考え方として市民が運営する組織がコーディネートすることもありえる。現在、市内では商工会議所が、まちづくり協議会を運営している。これは平成12年3月に野田市が策定した「野田市中心市街地活性化基本計画」を受けて、中心市街地の活性化をはかることを目的にして、商業者、市民、行政が連携してまちづくりを進めていこうとするものである。それは、元気店舗活用部会（中心市街地の空き店舗状況を調査し、新規事業者の育成や、店舗利用方法を考案し、現状の空き店舗の活用をはかる）、食と観光部会（観光資源や醤油醸造業を中心とする食文化を活かして観光客の誘致をはかる）、まちなみ部会（残存する歴史的建造物を調査して保存や活用をしたり、まちの景観の保護にもとりくむ）、野田ガイドの会（シニア世代の人たちによる市内のボランティアガイド）からなる。

なかでも、まちなみ部会の活動は、まちづくりのコーディネイト役という文脈上、これまでの市民活動では見られなかった新しい動きとして注目される。今のところは、主に建築士から

なるメンバーたちが、建造物の所有者と話し合いながら保存について調整を進めている。会としては文化財指定にもっていき保存と活用を共存させることを考えているようである。これまでは行政が所有者と交渉して指定する方式から、ここでは市民の視線で対象となる建造物を選定して、所有者との調整をメンバーたちが実施して、行政に指定を提案していこうとするものである。また、歴史的な環境を活かしたまちなみの景観も提案している。ここで留意することは他の市民の意見などを聴く機会をつくることであろう。外部に対して閉じた提案ではなく、公開して他の市民からも自由な意見を出してもらうことで、市民の様々な視点からの意見を調整して実現化に向けていくことである。こうしてそれぞれの市民団体が核となり、まちづくりをコーディネートしていき、行政とも合意形成をして実現していければ、市民によるまちづくりの新しいスタイルになるだろう。

個人のキャリアデザインと市民性

「個人がキャリアデザインをしていく、あるいはキャリア形成をしていく時に、自分の職業としてキャリアを積んでいくだけではなくて、どうやって個人が地域の人間になるか、まちづくりの担い手になるか、ということがあると思います。シチズンシップということがよく言われますが、市民性とか市民的な資質とか、市民として考えたり行動する能力という意味だと思えます。どういうふうに市民性を自分のなかでつくっていくキャリア形成というのがあるのか、キャリア形成のなかに職業的なキャリア形成と同時に地域の人間として、まちづくりの担い手として自分がキャリアを積んでいくことをもっと統合して考えなければいけないと思います。これまでの日本人の生き方と確かに違うわけで大変なことです。個人のキャリア形成を職業的なところを軸に考えるだけではなく、どのように地域の担い手になり、地域の市民になっていくのかというキャリアデザインについても考えていきたい。」（以上、児美川氏の発言）

先述したように野田地方文化団体協議会の人たちは、終戦後の解放された雰囲気の中で、「何か」をやろうと集まった。文化を共有する者たちは、職業を越えて自由に語り親交して楽しむことでコミュニティとしての仲間が出来た。それは地域の文化コミュニティのようなものだった。そこでは目標（ビジョン）が掲げられて、さらに目標を達成するために組織をつくり、計画や行動を開始することになる。目標に具体的な行動が伴うことにより、おそらくはその反応もよく手ごたえを感じたことから、それは地域社会への貢献を射程に入れたものとなっていく。調査をして分析をしなければならないが、個人の市民としてのキャリアはそうしたプロセスの過程で形成されていくと考えられる。

なお、市民性とは個人や地域の人たちの自覚によるものだろうが、来訪者にも市民性を感じさせる、まちづくりが行われているところがある。その一例が、長野県の長野市松代である。このまちは真田10万石の旧城下町である。今年2度この町を訪れたが、旧松代藩校の文武学校、佐久間象山にちなむ旧跡、真田邸、武家屋敷など文化資源が豊富にあり、しかもそれを市民のキャリアデザインの資源として活用している。そうした資源をまちづくりの一環として活用するために「エコール・ド・まつしろ倶楽部」を発足して、華道、茶道、邦楽、俳句、歴史探訪、郷土食などの市民活動がさかんである。シニア世代のガイドボランティアによる案内を通じて私が感じたことは、彼らが自らの町を訪問者に知ってもらうことに意欲的であることである。市街地にはゴミが落ちていないことにも驚いたし、景観保存も行き届いており、タイムスリップしたような錯覚を覚える心地よさを感じた。また文武学校や武家屋敷はいずれも国の指定文化財にもかかわらず、何の規制もなく自由に出入りができることにも驚いた。そこには行政主導によるまちづくりではない、市民の意識の成熟さがあり、そのことが前提となり行政との協働作業がうまくいっている。訪問者に心地よさを与えるのは、そうした成果の表れであ

ろう。

野田市が計画している定時制高校とキャリア教育

「野田市で存続を計画している定時制高校の話を書いていたときに、前提がキャリアとかキャリアデザインというと、どうしても個人が担うもの、もう少し言うと自己責任でするものというようなニュアンスがあると思います。ただ同時に定時制の問題の時に、非常に困難を抱えている人、特別なニーズのある人、本人の責任ではなくてハンディーキャップを負っている人というのは当然いるわけで、そういう人たちの支援の問題をこのキャリアデザインという枠のなかでどう捉えたらいいのか、ということも大きな課題だと思います。東京では定時制高校がどんどんなくなり、本当に困っている中学時代の不登校経験者とか沢山います。親御さんたちも困っていて相談を受けることも多々あります。そういうところはやはり公的な形で支えていく部分も必要だと思うし、全体としてそこらへんをどう考えるかということも今後の課題となるのではないかと思います。」（以上、児美川氏の発言）

最近、玄田有史氏が著した『希望学』（中公新書ラクレ 2006）によれば、「希望」とは希にしか実現しないものであるが、実現する可能性がほとんどなければ、「希望」をもたない方がよいのではなく、「希望」がなければ人は良い生き方が出来ないという。そのとおりで思う。

千葉県による県立高校の統廃合計画により、県立野田高等学校は平成20年度に他の高校と統廃合することが決定した。野田高校には定時制が併設されているが、その部分は統合の対象とはならず廃止となる。現状の定時制は、不登校等の問題で他の高校に進学できない生徒や中途退学等で再出発を望む生徒の受け皿となっていたり、身体障害児を積極的に受け入れていること等から、そうした生徒たちのキャリア形成にとっての不可欠な教育機関となっている。財

政削減の為に県が廃止すれば、彼らの受入先はどこにもないことになる。そこで野田市は、特区の認定を受けて公私協力型による新定時制高校を設立することを予定している。その中にはキャリアデザインの考え方を入れた指導や教育課程を想定している。「希望」という文脈からいえば、定時制存続は、彼らに希望をもたせる装置になる。仮に行き場がなくなれば、ニートなどのように社会を浮遊する若者になっていくことになりかねない。

しかしながら、シンポジウム後の2005年12月議会で、市は国からの財政支援が得られる見通しが立たなくなったことを明らかにした。それは、特区による高校も私立学校の一類型として私学助成の対象となることを文部科学省から聞いていたところ、財務省の見解では補助対象にならないことが判明したことや、地方交付税措置についても実績がないことから不透明であるというものである。残念ながら新定時制高校の運営方策については現時点では開校の見通しが立たなくなっているが、今後とも多角的に検討していくことになるのだろう。

4 まちづくりとキャリアデザイン

キャリアデザインというと、まだ多くの人が職業キャリアに限定的に捉えがちである。一言でいうならば、自分の人生をデザイン（設計）することであるといえる。では、なぜ今キャリアデザインが問われるのか。これまでの経済成長を続けていた社会では、よい学校にいけばよい就職ができて幸せになれる、という金太郎飴のような生き方が良い人生とされてきた。しかし、90年代以降の社会の急速な変化にともない、これまでの生き方が通用せずに様々な社会問題が起きている。働かない若者の急増や、信じられない事件・事故の出現や増加など枚挙に暇がないほどである。つまり人の生き方が社会の変化に追いつくことができずに、そこに大きな溝が生じて、諸問題が発生しているのである。キャリアデザインは、変化する社会に通用する

生き方を開発することである。よって好むと好まざるとに関わらず、全ての人がキャリアデザインをはかることになる。

今回の大会によって明らかになった一つのは、「まちづくり」はそれ自体が目的となるものではなく、まちづくりの過程の中から「人づくり」が行われていくことが確認されたことであろう。それは地域コミュニティにおいて、人がその担い手となり、どのように市民性を具えていくかというキャリアデザインを今後考えていく契機となった。

まちづくりの萌芽は、気のあった仲間が集まり、最初は何気ない話題をもとに情報交換する自由で楽しい場である。趣味の会や習いごとサークルなどもこの部分に属するだろう。しかしこれは仲間だけの閉じたコミュニティといえる。これまでの「生涯学習」としての活動はこの部分のコミュニティが多いのではないだろうか。文化団体などと呼ばれる市民サークルはこの部分である。

次の「まちづくり」の段階になると、その人たちが自分たちの周囲のことに関心を持ち、つまり（地域）社会に関心をもち、社会のために少しでも良くなることをやろうという意識をもつことが想定できる。これまでの会に参加することから自立化に向けた志向である。そのためにはビジョンを掲げて、実現するための人材の選定、資金の調達、場所の確保などのマネジメントをしていくことが要求される。そうした活動は、最初は独善的なものかもしれないが、次第に周囲の人たちから認められたり、よい反応が寄せられることにより、その活動は社会貢献性を帯びたものになっていく。逆に認められなければ継続性はないだろう。それは開放型のコミュニティとなり、連携関係をもつことになる。相手は行政、企業、市民団体、社会事業団体など様々である。メンバーたちは市民としてのキャリアデザインをしていくことになる。つまりこれまでの住民からシチズンシップをもった市民へと進化していくことが想定される。

しかし、せっかく活動が軌道にのったにもか

《中間大会報告》

かわらず、数年で活動が停止したり休止することがある。これについてよく言われる原因は、中核的に指導してきた人材の欠如や、財政不足などがいわれる。確かにそれも一理あるが、他の原因としては組織が護身的になり、柔軟性がなくなることも危険因子としてあるだろう。自立化した人たちにとっては柔軟さが魅力的であるが、その部分が不足するとボランティアを支えるエネルギーが衰退することになる。組織運営上の緩い紐帯（ウィークタイト）も不可欠となる。要は、上昇的で継続性を確保する組織マネジメントに配慮することである。

現在、私は野田市民の一員として、NPO 法人野田文化広場（シンポジウムの下津谷達男氏の発言部分を参照）を運営している。この団体は先述の野田地方文化団体協議会の事例を意識して、「文化をキーワードにしたまちづくり」を標榜しているが、今後は野田市内のキャリアデザインの拠点として機能させていきたいと考えている。

なお、このたびの大会の実施にあたり関係各位の皆様には多大なご協力をいただきましたことに対して、心よりお礼申し上げます。

（かなやま・よしあき 法政大学キャリアデザイン学部助教授）